

モー ヨルゲン Jørgen Moe 一八三三—一八二一 ノルウェーの詩人、民話作家、牧師。一八三〇年ごろからアスピヨルセンとともに、ノルウェー各地を歩いて民話を収集し、共著で『Norske Folkeeventyr ノルウェー民話集』(一八四一—四四)を出版、民族文化の高揚に貢献した。ほかに単独で『Samling av Sange, Folkeviser og Slev i norske Almuedialekter ノルウェー方言による民謡、小歌謡』(四〇)も出版し、民話ばかりでなく、言語改革運動にも力を尽くした。ノルウェーではこれ以後、民謡の発掘が盛んに行われることになった。詩集『Digte 詩』(四九)は、抒情的な表現をとりながらも、当時のノルウェー農民の生活を題材にしたリアルな詩が多く盛り込まれている。また、この詩集には、モーの自然描写の巧みさ、細部をも見逃さない観察眼の鋭さが感じられる。児童向けに出版された物語集『I Breenden og i Kjænet 井戸の中、沼

の中』(五一)には、モー自身の育った東ノルウェーの農村の様子や、自分の子ども時代の思い出が生き生きとしかもユーモラスに語られている。(山口卓文)

### 最上二郎

じょうらふ

一九三二—(昭六—) 児童文学

作家。福島県郡山市に生まれる。福島大学文学部卒業後、小学校教諭となる。初任地の分校生活の中から獵師や動物に取材した児童文学創作活動に入る。郷土性に根ざした児童文学の創造と普及ならびに地域の子どもの文化の推進を目的とする「山彦」の同人。作品には、東北の山深く住む獵師の生活を興味あるストーリーとして『マタギ少年記』(一九六二)、『ギターをひく獵師』(六八)などがある。(武田京子)

### 木曜手帖

もくようてい

月刊童謡誌。サトウハチローを

中心に「木曜会」の集まりがもたれ、一九五七年(昭32)四月に創刊。現在なお刊行されている。創刊時の編集同人は、サトウハチロー、野上彰、藤田圭雄、片山忠男、米津千之、渡辺三郎の六人。上記三人が責任編集に当たり、毎週木曜日に新人養成に的をしぼって勉強会が重ねられ、また雑誌が刊行された。そこから名取和彦、宮中雲子、若谷和子、安藤晃子、宮田滋子といった新人を世に送った。養成した若い人たちは二〇〇人にも及ぶ。(吉田定一)

### モスカ

ジョヴァンニ Giovanni Mosca 一九〇八

— イタリアの児童文学作家、ジャーナリスト。小学校

の教師をした後、ジャーナリストとして活躍し、イタリアを代表する児童新聞「コッリエーレ・デイ・ピッコリ」の編集長をしながら、多くの児童文学作品を発表した。その代表作は、一九三九年というイタリアにとつていちばん暗い時代に出版された『ぼくの学校』だが、戦時色はない。戦後には、軍隊生活を批判した『*Piedi caldi e piedi freddi* あつい足とつめたい足』(一九五六)などもある。

(安藤美紀夫)

**茂田井武** むたい 一九〇八〜五六(明41〜昭31) 画家、童画家。東京日本橋の旅館の次男として生まれる。一九二六年東京、赤坂中学校卒業後、川端画学校で絵を学ぶかたわら、アテネ・フランセでフランス語を習う。三〇年ハルビンより働きながらシベリア鉄道でモスクワからパリへいく。パリでの生活は美術館などには寄りつかず、裏街の子どもや大人を相手に絵を描き、市井の哀歓に交じることを喜びとした。四年間の遊行の末帰国するが、南京豆売りなどさまざまな職業を交転する。三六年雑誌「新青年」に連載中の小栗虫太郎『二十世紀鉄仮面』の挿絵を描き、特異な才能を発揮する。三七年はじめて、児童のための絵本『ナニナニ絵本』を手がける。四七年日本童画会入会のことより「子供雑誌」「こどものはた」などの雑誌に才能を発揮する。五二年持病の喘息が悪化、五四年小学館児童文化賞受賞。健康の悪化とは逆に作品は深さと輝きを増す。五

六年『ジャータカ物語』『ゼロ弾きのゴースト』の挿絵は病床で描く。この年の一月二日永眠する。死後編まれた童画作品集に『茂田井武画集』(一九六〇)と『茂田井武の世界』(七六)がある。

(伊藤元雄)

**望月芳郎**

もちづき  
ほうろう

一八九八〜一九四五(明31〜昭20)

童話作家。山梨県塩山町に生まれ、東京農業大学卒業。千葉農業学校教諭に就任後、郷里で酒造業を営み、地方文化の向上を志し、芥川龍之介を招いて夏期大学(一九二三)を催したりした。一九三九年、同郷の老沼堯の起こした文昭社刊の『日本の子供』の編集、四三年京城日報「小国民」編集長、同参事、文化部長。四五年三月二二日、京城にて歿。童話集に『月の明るい野原』(四〇)、『白い河原の子供たち』(四二)がある。

(村松定孝)

**モチーフ motif** 素材やテーマと混同されやすいが、芸術的衝動、つまり作家が、素材やテーマに対して具体的な作品として表現したいという動機あるいは素因のことをいう。したがって、それは、作家の内的要求から創作の過程まで働く中心的関心を示し、作品成立の基礎を成す。つまり作品を書く上の主體的な情熱ということになる。児童文学である以上、意識するしないにかかわらず子どもへの関心にかかわる作家的情熱を無視できない。

(西本鶏介)

**本居長世**

ながよ

一八八五〜一九四五(明18〜昭20)

作曲家。長なが豫よ、如きさらぎ月つき、一いっ浩こうの名も用いた。国学者本居宣長五世の孫。東京下谷に生まれ、一九〇八年、東京音楽学校ピアノ科を首席で卒業。同校助教として、中山晋平、弘田龍太郎などを育て、また邦楽調査係を兼任した。在学中から小歌劇・ピアノ曲などを作曲したが、最も活躍したのは童謡の分野で、雑誌「金の船」に「金の星」「童話」では、野口雨情と西条八十の童謡への作品を毎号発表した。ことに二〇年の『十五夜お月さん』は、はじめて日本の子どもの心を芸術的に作曲した作品としてのちの童謡曲のお手本となった。ほかに、『七つの子』『赤い靴』『青い眼の人形』(以上、野口雨情詩)、『めえめえ児山羊』(藤森秀夫詩)、『お山の大将』(西条八十詩)も広く歌われた。一般に邦楽的な音階・旋律に、洋風な伴奏をつけたものが多く、転調を好んだ。ほかに一般歌曲として、『白月』『別後』などの作もあり、また、宮城道雄たちと結んで、新日本音楽を唱導した功績もある。童謡作品集に『新作童謡』全二四集(二九二―二九五)、『金の星童謡曲譜』全集(二二―二四)などがある。

元田永孚

もとた ながきね

(金田一春彦)

物語絵本ものがたり 絵本を物語絵本と知識絵本に二大別した時の用語。英語で picture story books と言う。便利に使える用語ではあるが、改めて考えるとかなり内容の不明確な用語でもある。すなわち、知識・学習の絵本といわれるものも、あいいうえお(アルファベット)絵本や数の絵本を考えてみると、作者は主題を無味乾燥に陥らせないよう工夫を凝らして、多くはゆるいながらストーリーを与え、内容に一貫性をもたせようとしている。渡辺茂男・山本忠敬の『とらつくとらつくとらつく』はいわゆる乗物絵本であるが、とらつくが荷を港の倉庫から町へ運ぶという設定で、働くとらつくの姿を主に、途中で出会っいろいろな自動車を描いて、

絵本が図鑑と違う点をよく示している。このようにたとえ知識絵本でも、絵本であるためには物語性が必要になる。そういう認識をもつと、物語絵本だけが物語の専売特許というわけにはいかない。絵本は全て物語であることを基本にもつていて、その意味では絵本はすべて物語絵本という共通性格をもっているといういい方も不可能ではない。とはいえ、やはりここにいる(狭義の)物語絵本は物語の楽しみを読者に提供することを第一の目的としたもので、その楽しみの提示が絵とことばのよいチームワークで行われた本であるという性格ははっきりしている。物語絵本は、昔話絵本と創作(物語)絵本、古典(名作)の再話またはダイジェスト絵本、童謡(マザーグース)絵本といった種類分けができるが、中でもいわゆる創作絵本が物語絵本の中心的存在を成す。しかし、オリジナルなストーリーによる絵本は、西洋の絵本についていえば、ドイツのブッシュの『マックスとモーリッツのいたずら』(一八六五)あたりが先駆で、バンナーマンの『ちびくろさんぼ』(九九)、ポターの『ピーターラビットの絵本』(一九〇一以降)あたりから二〇世紀に入ってにわかに絵本の主流を成しはじめたといつてよいであろう。(吉田新一)

物語詩 たりのものが ballade 南仏プロヴァンスに起源をもち、ロマンス語圏に広がった定型詩。元来は舞踊に伴って歌われた。これが吟遊詩人トルヴアドゥールに

よつて芸術的に洗練され、一四世紀フランスで、厳格な形式を備えた抒情詩の一形態となった。この詩型は一五、六世紀に盛んに用いられ、ペトラルカ、ダンテ、ボッカチオ、F・ウィヨンなどの名作を生んだが、一六世紀中葉からオードやソネの隆盛に圧倒された。一九世紀以降、広く物語詩一般を指して用いられている。(石沢小枝子)

#### 模範家庭文庫

いほんかて

児童文学の叢書。富山房より

一九一五年(大4)に創刊され、第一集一二冊、第二集一二冊、合わせて二四冊を刊行して三二年(昭7)に完結。「発行の趣旨」にあるごとく、「長い『時』の飾にかけられて、世界各国幾万人の家庭に読み広められ」た古典を、「少年少女諸君のまどろの優しい師友であると共に、永く家庭に藏めて書齋の宝典となり、客間の裝飾品ともなる」ようにとの意図で刊行された。第一集は『アラビヤナイト』上・下(杉谷代水訳)、『グリム御伽噺』(中島孤島訳)、『ロビンソン漂流記』(平田禿木訳)、『日本童話宝玉集』上・下(楠山正雄編)など、第二集には『支那童話集』(池田大伍訳)、『朝鮮童話集』(中村亮平訳)、『印度童話集』(岩井信実訳)などアジア地域の古典の加わったのが新鮮だった。当時出されていた実業之日本社や春陽堂などの児童叢書が定価一円程度であったのに、三円以上の高価だったが、それに見合った美麗にして堅牢な造本であった。装丁・挿絵には当

初岡本帰一が起用され、イギリス一九世紀末の挿絵画家の模倣が目立ったが、巻を重ねるにつれて多くの画家のユニークな挿絵で彩どられるようになった。企画・編集には楠山正雄の力が大きい。(江森隆子)

百田宗治ももた そうじ 一八九三—一九五五(明26/昭30) 詩人、児童文学者。本名宗次。大阪市西区の生まれ。高等小学校卒。個人的にフランス語を学ぶ。人道主義から民衆派詩人に進み、しだいに俳味のある作風に移った。『一人と全体』(一九一六)、『何も無い庭』(二七)、

『冬花帖』(二八)、『ばいぶの中の家族』(三二)などは代表的詩集。大陸での『漢口風物詩』は戦時色のない詩として評価されている。詩誌『椎の木』(二五)を主宰、伊藤整、三好達治、丸山薫、阪本越郎、春山行夫ら多くの詩人を養成した。大正期童謡運動の波の中で、童謡・少年詩もつくりはじめ、草川信によって作曲された『どこかで春が』(二三)は広く愛唱されている。昭和期に入ることより、アランの『教育論』に親しみ、「椎の木」の同人であり、現場教師だった吉田瑞穂と交流、両者呼応してしだいに児童詩の世界に入る。『童謡はこどものうたう歌だ。声をあわせて楽しむ唱歌だ。だが、詩でこどもは生活する』といって、北原白秋『赤い鳥』を止揚する児童生活詩を提唱した。生活綴方運動と相まって「工程」「綴方学校」「教室」と次々に児童文化誌を編集、「文集展望」の指導や講演旅行により、全国

各地の現場教師の支持を受け、白秋につぐ第二の峰となった。戦前戦後を通じ、児童生活詩の実践人として、百田の指導や影響を受けなかった人は少ない。『綴方の世界』(三九)、『小学生詩の話』(五二)など、作品の集成となる著書も多い。戦時には日本児童文化協会の実行委員、顧問となった。戦災を受け、札幌に疎開したが、戦後、千葉県安房郡岩井に移り、赤とんぼ会会員として、広く児童文化発展に貢献した。(佐藤辰雄)

桃太郎ももたろう 川を流れてきた桃から生まれた男の子。成長して黍団子をもち、犬・猿・雉を供に連れ、鬼が島の鬼を退治し、宝物をもち帰る昔話。全国的に流布している。江戸期に入ってからしだいに、子ども向きの昔話として語り伝えられ、猿蟹合戦、舌切雀、花咲爺、兎大手柄と並んで、日本五大昔話の筆頭に数えられている。一八八七年以降、国語教科書や唱歌に取りあげられ、また数多く絵本化されてきた。さらに児童演劇・映画・テレビ化され現在に至っている。桃太郎の生まれた桃は、古事記においても悪霊を退散させる霊果として扱われているが、外国にも植物から生まれた子の英雄伝説がある。柳田国男は『桃太郎の誕生』(一九三〇)の中で、水辺にたどりくる神の申し子、異常な生まれの子が、偉大な事業を成し遂げ、一族の繁栄の祖となるという説話は日本に古くからある小さい信仰が背後にあると述べており、桃太郎はその典型

であると考えている。

(福原登美子)

モランテ エルサ Elsa Morante 一九一八―イタ  
リアの作家。ローマの生まれ。夫はイタリア文学を代  
表する作家アルベルト・モラーヴィア。処女作である  
短編集『Il giacco segreto 秘密の遊び』(一九四二)のほ  
か、代表作『禁じられた恋の島』(五七)など、数多くの  
作品がある。児童文学の作品としては、『カテリーナの  
ふしぎな旅』(五九)がほとんど唯一の作品だが、この作  
品が書かれたのは、作者一二歳、一九三〇年ごろと考  
えられている。

(安藤美紀夫)

森 一步 いっぽ 一九二八(昭三) 小説家。

本名和男。北海道旭川市に生まれる。慶応大学英文科  
在学中は「三田詩人」に参加。一〇年あまり日高地方  
で教員をした後、福田清人・戸川幸夫を頼って上京。  
神奈川県で中学校の英語教師をしながら作品を発表す  
る。一時『砂の花嫁衣装』(一九七八)などのジュニア小  
説で活躍したが本領は郷里北海道に取材した『帰って  
きた鼻まがり』(八一 日本児童文芸家協会賞受賞)など  
の人や生きものに対する愛の作品。処女長編『コロポッ  
クルの橋』(六〇)はソビエトで翻訳されている。

(香川 茂)

森 鷗外 おうがい 一八六二―一九三二(文久二―大正)

軍医、小説家、評論家、翻訳家。本名林太郎。石見国  
(島根県)津和野に、一三代続いた藩医の長男として生

まれた。六歳で藩校養老館に入り漢籍を学び、さらに  
父静男から蘭学を学んだ。一八七二年上京、西周のも  
とに寄寓、七四年東京医学学校子科に入学。八一年東京  
大学医学部を卒業、陸軍軍医となる。八四年ドイツ留  
学を命じられ、以後四年間ベルリン、ライプチヒほか  
で過ごす。八八年帰国。『於母影』や『柵草紙』の発表  
は翌年であり、滞欧中に身につけた西欧文学の教養は、  
新しい日本の文学の展開にこの上ない刺激となったの  
である。『即興詩人』『杵タ・セクスアリス』『雁』『阿  
部一族』『洪江抽齋』その他名作の数々を残しているが、  
少年文学についても『少年園』への寄稿、巖谷小波『こ  
がね丸』の序など関係が深い。また鈴木三重吉、松村  
武雄、馬淵冷佑との共撰標準お伽文庫『日本童話』(一  
九二〇)を完成させた。好短編『山椒太夫』(一五)は、  
山本有三が『日本少国民文庫』に収録以来、子ども向  
け名作となっている。

(桑原三郎)

森久保仙太郎 せんたくろう 一九一七(大六) 絵

本作家、教育評論家。筆名森比左志。神奈川県に生ま  
れ、鎌倉師範専攻科を卒業。横浜市保土谷小学校教諭  
などを経て、東京教育大学附属図書館図書文化協会主  
事、横浜国立大学、日本女子大学講師を歴任。代表的  
作品には絵本『くまざぶろう』(一九六七)、『ちいさな  
きいろいかさ』(七一 サンケイ児童出版文化賞受賞)、  
『オレンジいろのさかな』(七三)などがある。一九七三

年五月から「月刊絵本」に連載した『絵本鑑賞』は分析批評として説得力に富み、ストーリーがあつてそれを絵に描くという従来の絵本を否定し「絵で描くことによつて物語が展開する」絵本を評価した。他面、教育評論家としても活躍、とくに低学年教育に造詣深く、「児童心理」「学校図書館」などに実践的教育論を数多く発表している。著書に『教師のための相談選書』（一九五七）、『母と子の手帖』（五三）、『学級経営小事典』（六五）などがある。

**森 三郎** もりさぶろう 一九一〇（明44）— 一九九一（昭54） 児童作家。愛知県生まれ。前期「赤い鳥」の読者であり、後期「赤い鳥」の編集に、一九三二年（昭7）九月号より終刊まで携わる。同誌に、多くの童話を発表した。王朝時代や日本古典に取材した作品が多く、『かささぎ物語』（一九四二）、『お寺の柿の木』（四二）などがある。のちに『赤い鳥代表作集』（五八）の編集に力を尽くした。

（草野明子）

**森下雨村** もりした うみん 一八九〇—一九六五（明23）— 昭和40） 作家、翻訳家、編集者。本名岩太郎。高知県佐川町に生まれたので、佐川春風の別名がある。一九一〇年早稲田大学英文科を卒業。「やまと新聞」記者を経て博文館入社。「新青年」の編集を担当し、海外探偵小説の紹介と、新人作家の育成に力を注いだ。「少女の友」に連載した『怪星の秘密』（一九一六）をはじめとして、『富士

夫の冒険』（二三、佐川春風名）、『謎の暗号』（三三）などは少年探偵小説の嚆矢といわれる。

（二上洋二）

**森下 研** もりした けん 一九三〇—（昭5）— 児童文学作家。北九州市門司区に生まれる。九州大学を卒業し、放送作家としてテレビ・ラジオの脚本を執筆。一九七〇年ごろから、自分の子どもへの語りかけとして児童文学を創作。遠洋マクロはえ縄漁船に三ヶ月間乗り組んだ体験をもとに書き下ろした『男たちの海』（一九七二）で、児童福祉文化奨励賞を受賞。ほかに、『小さな大酋長』（七一）、『銭五とよばれた男』（七六）、『蒼い狼の子』（八〇）などの作品がある。

（北 吉郎）

**森 銑三** もり せんぞう 一八九五—一九八五（明28）— 昭和60） 近世学芸史研究者。愛知県刈谷生まれ。一九二六年図書館講習所を卒業。東大史料編纂所などに勤め、近世の人物研究を続々と発表。西鶴研究の新説で話題にもなった。児童文学では「赤い鳥」「子供の科学」などに執筆。『おらんだ正月—近世日本の科学者達』（一九三八）は戦後も版を重ね、『支那童話・瑠璃の壺』（四三）と『新御伽草子』（四八）の再話集は八三年『森銑三童話集』として『瑠璃の壺』にまとめられた。

（勝尾金弥）

**森たかみち** もり たかみち 一九〇八—（明41）— 童謡詩人、歌人、詩人。筆名ほたる。愛知県生まれ。幼くして両親に生き別れ、祖母に育てられる。高等小学校卒。丁稚、土木労働者、消防員、看護員などの職業に

つき住いを転々とする。一九二四年から「金の星」「赤い鳥」「お話の木」「綴方倶楽部」に童謡を投稿。白秋に囑望される。「赤い鳥」投稿の俊秀者を集めた童謡同人誌「チチノキ」に参加。リアリズム童謡で論客。童謡集に「足柄山の春」（一九四〇）、「朝陽の中の祭」（四二）、「裸の神さま」（七二）、「森たかみち童謡集」（八三）。ほかに詩歌、小説が八冊。

（赤吉著）

**森田思軒** しけん 一八六一—一九七（文久一—明三〇）翻訳家。本名文蔵。備中国岡山県小田郡笠岡生まれ。幼時から漢学に親しみ、一八七四年に慶応義塾大阪分校に入学。塾の移転により徳島に移るが、やがて東京本校に編入。このころ英書に親しむ。七八年に退塾して帰郷、興讓館にて漢学を修めるが、八二年に再び上京し、郵便報知新聞社に入社。かつて英語と漢学を修めたことが、のちの翻訳に大きく影響することになる。八五年には上海に報道員として赴き、中国を旅し、やがて『北京旅行』となって「郵便報知」を飾る。また特派員としてイギリス、ベルギー、ドイツなどを歴訪、紀行文を同誌上に掲載、のちに編集にも従事。その後思軒はヴェルヌの『仏曼二学士の譚』（一八八七）の新聞連載を皮切りに、翻訳家としての道を歩みはじめ。九二年に郵便報知新聞社を辞し、国会新聞社、万朝報に移り、同新聞や「国民之友」「太陽」「日本之少年」などの雑誌に、翻訳作品、批評、随筆、評論などを書

き、多方面において活躍したが、三六歳の若さで病死した。思軒は、ユゴー、ヴェルヌ、ポー、ホーソン、ディケンズなどの翻訳を手がけたが、ユゴー『探偵ユーベル』（八九）とヴェルヌ『十五少年』（九五）が有名。いずれも逐字訳でなく、格調のある漢文調で、いわゆる思軒独特の（周密文体）の訳文である。中でも『十五少年』は当時、若松賤子訳の『小公子』（九〇）とともに名訳とされたが、英語訳からの重訳であり、必ずしも訳出が正確でなく、ユニークな名文であるものの、今日からすれば若松訳の『小公子』の方が翻訳としての近代的意義は大きい。

（原 昌）

**森田たま** たま 一八九四—一九七〇（明二七—昭四五）随筆家。旧姓村岡。北海道札幌生まれ。庁立札幌高女在学中から文学を志し、「少女世界」、「少女之友」の常連投稿家で、たかね会に属した。上京して、森田草平門下に入ったが、森田七郎と結婚し、筆を絶った。中期になって文学活動を再開し、一九三六年の『もめん随筆』がベストセラーになる。以後『続もめん随筆』（一九三七）、「随筆歳時記」（三八）、「随筆ゆく道」（四六）、「今昔」（五一）など、女性の感性を生かした随筆を書き、特異な存在になった。五五年日本エッセイストクラブ賞受賞。児童文学の分野にも佳作を残し、童話集『鉛の兵隊』（三九）、再話集『私のアンデルセン』（四二）、少女小説『石狩少女』（四〇）、「踊り子草』（四二）

などがある。少女小説は、主に北海道を舞台に、少女の細やかな心情を描いている。(江刺昭子)

**森田 博** ひろした 一九三二(昭七) 児童劇作家。大阪府堺市に生まれる。奈良学芸大学芸術科卒業。

中学校に勤務のかたわら、主に中学生向けの上演脚本を書く。\*日本演劇教育連盟会員。主な作品に『だれかがよこしたちいさな手紙』(一九八六 日本演劇教育連盟第六回演劇教育賞)、児童劇『おおかみがやってきた』(七三 日本青少年文化センター作品募集・文部大臣賞)、少年読み物『恋のモーツァルト』(八〇)など。(小池タミ子)

**守田正義** もりよし  
まさよし

**森 はな** はなもり 一九〇九(明四二) 児童文学作家。兵庫県朝来郡和田山町に生まれ、明石女子師範を卒業して、三一年間小学校教師を務める。在職中は、読書・作文・演劇などの教育研究と実践に励む。退職してずっと今も加古川市に住み、児童文学の創作に専念。日本児童文学者協会新人賞の『じろはったん』(一

九七三)、絵本にっぽん賞の『こんこんさまにさしあげそうろう』(八二)など、ふるさと但馬を舞台にした、定評ある創作童話・物語絵本が多数ある。(渋谷清規)

**モルゲンシュテルン** クリスティアーン **Christian Morgenstern** 一八七二—一九一四 ドイツの詩人。

ミュンヘン生まれ。奇怪で特異なナンセンス詩集『絞首台の歌』(一九〇五)で有名。子どものための詩歌を数々書いた。見るべきものは、フライホルトの絵に作詩した『*Osterbuch* 復活祭の本』(〇八)や歿後をはじめて編纂された詩集『*Klein Irnchen* 小さなイルムヘン』(二二)に多いが、大半は不自然なあどけなきゆえに今ではあまり享受されない。若き日はニーチェに、晩年はR・シュタイナーに傾倒した。(川西美沙)

**モールズワース** メアリー・L **Mary Louisa**

**Molesworth** 一八三九—一九二二 イギリスの作家。子どもをリアルに描いた作品群(約一〇〇冊)で記憶される。一八七五年、短編『*The Reel Fairies* 糸巻き妖精たち』で登場した。教訓的な内容を残しながらも、楽しく読めるファンタジー作品『*The Cuckoo Clock* カッコウ時計』(一八七七)、『*The Tapestry Room* 壁かけの部屋』(七九)。(いずれもクレインの挿絵)や、幼年文学の先駆的作品『*The Carved Lions* 彫刻のライオン』(九五)などがある。(三宅興子)

**モルナール** フェレンツ **Molnár Ferenc** 一八七八

一九五二 ハンガリーの劇作家、小説家。ブダペストに生まれ、短編作家から劇作家となり、『リリオム』(一九一〇)で国際的な名声を得た。このほか、『近衛兵』(一〇)、『白鳥』(二〇)、『オリンピア』(二八)など数多くの戯曲を書き、欧米劇壇の人気作家となったが、第二次大戦前、ナチスの圧迫を避けてアメリカへ亡命し、戦後ニューヨークで客死した。小説の分野では、彼生まれ育ったブダペストの下町を舞台に、二組の少年たちの争いと和解を扱った『パール街の少年たち』(〇六)が、少年小説の名作として、日本を含む多くの国々で広く読まれている。

(徳永康元)

モーロア アンドレ André Maurois 一八八五—一九六七 フランスの作家。伝記、小説、歴史、評論など、多方面にわたる著作があるが、その良識に基づいた柔軟な文体は、優れた児童文学をも生み出した。ことごとく対立する二国を兄弟が探検する『デブの国ノッポの国』(一九三〇)や、何でも願いがかなえられる国での子どもの体験を描いた『わがままじいばいの国』(二八)は、いずれも巧みな風刺と諧謔に満ちた幻想物語である。

(谷 恭子)

モワット ファーレイ Farley Mowat 一九二一—児童文学のみならず、カナダ文学の第一線で活躍する児童文学作家。カナダ児童文学の正統に従って、大自然の冒険物語や動物物語の作品が多い。代表作に、極

北の地に迷った二少年の冒険談『バレンランド脱出作戦』(一九五六)と、続編『バイキング墓の宝』(六六)がある。ペットを主人公にしたユーモラスな動物物語に、『犬になりたくなかった犬』(五七)、『ぼくとくらしたフクロウたち』(六一)がある。

(桂 宥子)

モンヴェル プーテ・ド Maurice Boutet de Monvel 一八五〇—一九一三 フランスの挿絵画家。九人兄弟の長男として、オルレアンに生まれる。エコール・デ・ボザールに学び、歴史画家、肖像画家として知られるようになる。クレインの『Baby's Opera』幼な子のオペラ(一八七七)に刺激され、絵本の仕事に入る。一八八〇年に創刊された『サン・ニコラ』に迎えられる挿絵を連載。『Villes Chansons et Rondes』フランスの童唄とロンド』(八二)、『Chansons de France pour les Petits Français』子どものためのフランスのうた』(八三)にみられる繊細で小粋な表現は、クレインの影響を脱して独自のものとなっている。『Fables choisies pour les enfants』子どもたちに選んだラ・フォンテーヌの寓話』(八八)の抑えた色調も捨て難いが、何といても最高の傑作は故郷オルレアンの聖処女を描いた『ジャンヌ・ダルク』(九六)である。ほかに『Saint François d'Assise』アッシジの聖フランシス』(一九一二)や、フランスの『われらの子どもたち』『少年少女』(二八八六)の絵も忘れ難い。

(石沢小枝子)

モンゴメリ ルーシー・M Lucy Maud Mont-gomery 一八七四—一九四二 カナダの作家。プリンス・エドワード島のクリフトンに生まれる。生後二一カ月で母親と死別し、キャベンディッシュに住む母方の祖父に引き取られた。一八九四年教師の資格を得。一時、ハリファックスのダルハウジー大学で英文学を学ぶが、九八年祖父が亡くなるまで教師をするかたわら文筆活動に励む。その後は、祖母の世話をするためキャベンディッシュへ戻った。一時、一九〇一—〇二年までハリファックスの「デイリー・エコー」誌の記者を務めた。一一年に祖母が亡くなると、一〇年来交際を続けてきた長老派教会牧師マクドナルドと結婚。オンタリオ州で二人の息子を養育しながら、母親、牧師の妻、作家として活躍し、四二年六八歳で死去した。自叙伝『険しい道』(一九七四)がある。モンゴメリは幼いころより作家志望であったが、〇八年『赤毛のアン』の出版により、一躍有名となった。同時代にアメリカで流行した一連の少女小説や家庭物語と比較しても「アン」は個性的で実在感があり、現在に至るまで人気が高いカナダを代表する児童文学作品である。その後も、モンゴメリは精力的に続編を書き続け『アンの青春』(〇九)から『アンをめぐる人々』(四二)まで、アン・ブックスは一〇冊を数える。アンよりも、作者の自伝的要素が強いといわれる少女エミリーを主人公

としたエミリー・ブックスには、『可愛いエミリー』(二一)のほか二作がある。そのほかの作品に『果樹園のセレナーデ』(二〇)、『ストーリー・ガール』(一一)、『マリーゴールドの魔法』(二九)、『銀の森のバット』(三三)、『丘の家のジェーン』(三七)などがある。大人向けの小説として『青い城』(二六)と『もつれた蜘蛛の巣』(三二)、詩集に『夜警』(一六)がある。八五年、これまで未公開であったモンゴメリの日記の出版が開始され、従来書簡集や伝記などでしかうかがえなかったモンゴメリの実像が明らかになりつつある。

〔赤毛のアン〕<sup>アン</sup> Anne of Green Gables 小説。

一九〇八年。農作業の手助けに孤児院から男の子を引き取るはずの老兄妹のところへ、間違って赤毛でそばかすだらけの少女が送られてきた。この少女アンは、快活さと豊かな想像力をもって常に逆境を克服し、すばらしい女性に成長していく。プリンス・エドワード島の美しい自然描写とアンを取り巻く人々の優れた性格描写が作品の魅力を増している。少女小説・女性小説を好む日本人女性の読書傾向に合致するためか、五年に邦訳されて以来、熱狂的な愛読者が多い。

(桂 有子)